



第177号

発行所 上高井教育会
 発行人 上高井教育会長
 宮前日王
 編集人 会報編集委員長
 越忠男
 印刷所 須坂新聞社

改革への一步

一年をふりかえって

田幸重彦

会員諸先生の積極的な協力によって、本年度の教育会諸事業も多くの成果をあげて終りを迎えるようとしております。

それぞれの学校が取り組む実践や様々な問題を互いに披瀝し、より広い視野からいろいろな考えを出し合うことによって教師としての資質を高め、上高井教育を力強くすめてまいりました。また、これまで先輩が営々と築いてこられた上高井教育の歴史や理念に学びながら、新しい時代にふさわしい教育会のあり方を求めて精力的な取り組みがなされました。特に二十一世紀を指向した学校教育制度の改革に対応し得る足腰をどう強めていくかということを中心に考えていかねければならない時が来ていると思います。

一方、足元を見てみると、若い教師や女性教師が増加している現状を見逃すわけにはいきません。教育会の会合の持ち方、内容をしっかりと吟味し、有効性をどう高めていくかということが大切であります。限られた時間の中で、どれだけの内容を、どこまで深く、課題を明らかにしていくか。それは、ちょうど授業をどう仕組むかということと同じであろうと思います。

本年度は、改革必要感の高まりもあって、新しい第一歩を踏み出した年であります。新教育会館の完成によって、会館が研修と情報発信の場にふさわしいものになったにもかかわらず、内からの改革がなされなければ、上高井教育の更なる進展は望めない。会の「改革実践の年」という願いを受けて、具体的に計画が進められました。研究日

のもち方、教育研究集会の分科会をテーマ別、問題別に再編し、土曜日半日とするのと、時間短縮によって、参加者の意欲を高め、積極的参加を促し、研究会の質を低下させないという改革の方向は、新しい時代の研究のあり方として評価できると思います。間接的に教育会ともかわりをもつ郡市PTAの改革も、子どもたちの未来像を描きながら現実的視点を常に確立して、新たな出発をした年であったと思います。

最近、生活科では、「見返し」ということがよく言われます。そのことについて、少し書いてみたいと思います。

三年生の国語教材「三年とうげ」の学習をした時のことです。私は、この機会に民話に親しんでもらいたいと思い、「民話を使って何かしてみたいことはないかな。」と投げかけてみると、●本作り●紙芝居作り●紙人形劇●民話作り●朗読 という声があがりました。そして、それぞれやりたいグループ、または、個人に分かれ、活動を始めました。始めてみると、私が予想もしなかったような子どもたちの姿が見られました。自分たちで場面分けや段取りを工夫したり、一年生の時に作ったしかけ絵本を思い出しながら本作りを楽しんだりしている姿が見られたのです。

鷹野 俊江

二年後の見返し

十月七日(火)には、女教師研究大会がもたれました。今日の問題を中心に熱心な研究討議が行われました。

第十九回研究発表会は十二月六日(土)に行われました。地域素材の教材化やライフワーク等の貴重な発表を通して、会員の日頃の研鑽の深さや人柄に接することができ有意義であつたと思います。

最後になりますが、上高井教育会を代表して信濃教育会の各種研究調査委員会に参加し、信教の研究推進と上高井とのパイプ役を果たして活躍されている先生方に心から感謝申し上げます。

活動を通して、子どもたちは物をつくることの楽しさ、イメージや夢の世界を味わいながら表現することの喜びを感じつつ、そういう活動をした自分自身に手応えを感じてきたのかもしれない。

そのような体験が今回の民話づくりにつながっているのかもしれない。(もちろんそれだけではないとも思うのですが)

さて、最初にも書いた「見返し」ですが、その一時間で民話づくりで見られたように、様々な体験が溜まり込んでいき、時を経て見返されるものとなるのではないのでしょうか。過去の体験を生かして活動を広め、深めていく上での見返しが。

そう思うにつけ、子供たちにどれだけ、その「見返し」に足る体験の場を保障してあげられるか。その子にとって、どれだけ意味のある体験をさせてあげられるかの大切さを、楽しく民話づくりをしている子供たちを見ながら、改めて感じました。(小山小)

オーケストラから学んだこと

小口 弘美

私は、七年前より、長野市にある交響楽団（オーケストラ）に所属し、その中でお世話になっております。

毎週の練習は、時には疲労感から苦痛になることはありますが、それでも何をやっても長続きしない自分がこれだけ続けて練習に参加し、この団体に所属していただけるのは、大きな理由があります。

それは、なによりも温かな言葉がけなのです。そこからとても学ばせていただくことが多いのです。例えば……



四年目の演奏会で本番の十分前、私の楽器（フルート）が壊れてしまった時のこと、指揮者の先生の言葉「もしあなたが今まで練習を十分間やらなかったとしたら、壊れたのは本番だったね。今まであれだけ練習してきたから本番前に壊れたんですよ。本番中じやなくて本当によかった」

「楽器の調整ぐらいやっておきなさい」などと言われるだろうと思うところにあるのだと思います。また、昨年の演奏会、大好きなモルダウの演奏途中のこと、自分が演奏する木管

理にお互いの音を合わせようとしてギスギスした音を聴きにくるのではないのですよ。今日のような演奏を求めているのですよ。今日来てくださったお客さんは、すごく幸せだったと思いますよ」

本当に求められているものは何か、自分の価値観の狭さを思い知らされます。もし自分ならこのような演奏になつてしまった生徒に、このような言葉がかけられるかと……無理だと思えます。こう考えると、もし私がこの楽団に入っていないければ、私はもっと生徒に悲しい思いをさせる教師になっていたでしょう。偏った自分の価値観だけを押つけていたでしょう。私はこの楽団の中で、教師としての自分も確かに育てていただいているのだと感じるのです。大人でもうれしと感じる言葉がけ、生徒だってもっと自分を見つめ直す機会を与えていただいている楽団、こんなすてきな仲間がいることを幸せに思います。オリンピック文化事業として、一月一日に第九演奏会に参加でき、また二月にはオリンピックを記念して作曲された新曲の発表演奏会も予定されています。自分の活動が生徒に元気なうって返すことができればうれしいことですし、オリンピックへの関心にも繋がればとても幸せです。（墨坂中）

研究発表を終えて

小林 和子

『米子鉱山の教材化を通して』と題して、米子鉱山と人々の関わりについて江戸時代の硫黄稼ぎを中心に研究発表をさせていただいた。地域素材の扱いは難しく、注意してその教材化を図っていかねければ教材的価値を見失ってしまうこともある。須高地区の酸性河川と硫黄鉱山との因果関係については判断の難しいところであり、悪環境をもたらしたとする見方で米子鉱山をとらえられなかったし、そういう方向での教材化は小学生にはふさわしくない。郷土に誇りの持てるような教材化が必要と考えたわけである。そこで、先にも述べたように江戸時代における硫黄稼ぎ

研究発表会に参加して

越 正行

毎年参加している研究発表ですが、今年も心うきうきの気分で行きました。当研究発表会は、教材研究、教育実践にとどまらず、教師人間としての生き方の発表というところで、大変意義深いものと思っています。

今年のは発表では、生活科学習について、学習の展開を子供たちを育てる視点でこれからの生活科学習の方向を目指すものとして大変興味を覚えました。

また「オーケストラから学んだこと」では、O先生の音楽の専門に関わる技術的なものというより、オーケストラを団の中で学びながら、自己人間追求ということである。

くださったことである。『失敗してもいいじゃないか。今の精一杯の裸のお前をさらけ出せばいいじゃないか』

(2)『共に伸ばす』。多くの先生方から身にある労いの言葉やありがたいご批正をいただいた。「後半が取ってつけたようで、要らなかったな」「言いたいことが絞られていないかったんじゃないか」等々。教師集団の資質向上を願う熱き心を感じた。

(3)『上高井の伝統』。会場正面に掲げられた『上高井教育会』の文字のすばらしかったこと。会場の片付けをされていた先生から「毎年、発表者にこの演題をお土産に持ち帰ってもらっているんだよ」と私の名前が書かれている演題をいただいたこと。

脈々と流れている上高井教育会の熱き精神と向き合い、己のあり方を問いながら、一日一日を大事にし邁進したい。（仁礼小）

て止まらない厳しさに感服というところだ。

米子鉱山での硫黄の採掘はつい最近まで行われていた。分教場もあったんですね。あの権現滝を眺めながらの厳しい労働と経営、時代の流れによる中止という事態で今日に及んでいる。こんな昔からの地域の教材を掘りおこしての教育の値打ち。よし、また鉱山跡に行ってみよう。

（相森中）

生活科のこま作りの実践を通して

笠原 綾子

休み時間のチャイム。あいさつも終わるか終わらないかのうちに外へ飛び出していく元気な子ども達。でも、ふと子ども達の様子に目をやるとそういう子ばかりでもないことに気づく。何をしたらいいのかわからず手もちぶさたにしている子、積極的に友達とかかわってどのように遊んだらよいのかわからないような子等も見かけられる。

子ども達と「休み時間した遊び」について話し合ってみた。口を開けば、テレビゲームやポケットモンスターと言う子ども達。この話し合いでも、きっとそういう方向にいくだろうと思っていた。でも、意外にも「学校には学校でなければできない遊びがあるんだからそういう遊びをしたい」という声があがった。おうちの人も、子ども達のこの話し合いの様子を学級通信で伝えたり、学級PTAでも話し合ってもらったりした。おうちの人の考えも聞いてみる中で「友達とかかわって楽しく遊びこめる環境を設定してほしい」という願いが寄せられていることもはっきりとしてきた。そして、子ども達や親の考えをふまえながら、子ども達がなるべくたくさん遊びを経験できるように活動することにした。子ども達は、いつも大人顔負けの豊かな発想と工夫で活動にのめり込んでいく。中でも特に夢中になったのが「こま」だった。これは子ども達一人ひとりが自分の作りたい思い思いのこまを作り、それぞれに追究の姿が見られる活動だった。

うように巻きつかない。それでも、Y君は回してみても回ったので、それはそれで満足気だった。それからはすぐに次のこま製作には入らず、穴をあけたらいたたりするコーナーへ行き、友達の様子を見ているだけだった。でも、しばらくすると、Y君は、この間まで苦労していた木ごまに、なんと穴をあけ、芯棒を通して、ついに完成させた。そして、さらにもうひとつ木ごまを作りあげただけでなく、教師が小さい穴に芯棒をたたいて通そうとしているのを見て、「たたくと割れるからよ

本校の宝②

小山小学校の宝―その二―

小山小学校には、いくつかの宝があります。平成五年十月発行の上高井教育会報第一五七号に本校の宝として、二幅の額とトチの木が紹介されています。今回は、それらに続く宝として、小山小学校校歌を紹介いたします。

小山小学校は、昭和十六年町立小山国民学校として独立するまで、須坂尋常高等小学校小山部校でした。自校の校歌を持っていない、長いこと「君が代」をことあるごとに歌ってきました。

昭和二十八年、創立八十周年にあたり、「ぜひ本校にも校歌を」という声が高まり、作

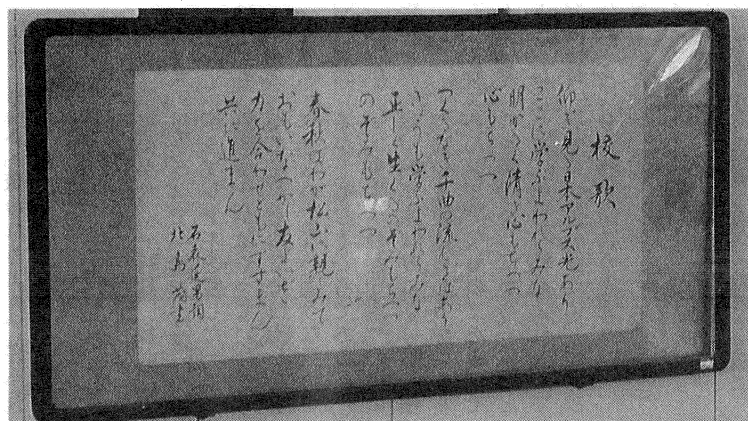
りこまを回すY君のうれしそうな顔が印象的だった。静かな中にも、子ども達は自分のこだわりを持ち続け、意欲を燃やし続けているのだということ、私自身も学ばせてもらった。(高山小)

教育会だより

- 12・1 第6回常任委員会
- 12・2 研究小委員会
- 12・6 教育会研究発表会(於須坂小学校視聴覚室106名参加)
- 12・11 第6回代議員会
- 12・16 教育研究集会三団体反省会
- 1・13 第2回研究委員会世話係・委員長会
- 1・20 研究小委員会
- 1・22 第2回同好会世話係・会長会
- 2・2 第7回常任委員会
- 2・12 第7回代議員会
- 2・27 上高井教育会報第177号発行

詞を石森延男先生、作曲を下総院一先生にお願いしました。同年六月十六日、五十周年を祝う中、校歌発表会が行われ、小山小学校校歌が制定されました。

その時の校長先生であられた神林清先生が百年史に思い出を寄せています。そこには「昭和二十八年には、開校八十周年を記念して、校歌を制定することになりました。作詞は、私がよく指導を仰ぎ、懇意にしていただいていた、教育者・童話文学作家である「野菊」を作られた石森延男先生にお願いしました。先生は快くお引き受けくださって、美しい自然をたたえ、その恵みの中で、明るく清く、友と力を合わせ、正しく生きることを目指した校歌は、皆に親しまれ、愛唱されています。(松本清子)



火ばら談義



高山中 綿田

趣味？それとも教材研究？

山本 訓子

学校を訪れる方に「体育の先生ですか？」と聞かれることが多い私ですが、実は理科を教えています。学生時代に実験のおもしろさ、感動をたくさん味わわせていただいたことから多くの生徒にも自分と同じような体験をしてほしいという気持ちで授業をしています。しかし、限られた授業時間の中で何ができるのか毎日、頭を悩ませています。

身近な物を何かに利用して実験ができないか、そんな思いからペットボトルや空き缶、牛乳パックなどは捨てられず、買い物に出かければ、これ何かに使えないかという物を探しにいろいろな売り場を見て回る、恥ずかしながらとうとうそんな癖までついてしまったようです。さて、これをどう授業で活用するか、正直なところ多くの場合、本に載っているアイデアを参考にさせていただったり、他の先生の実践を参考にさせていただったりします。こんな時、自分の知識不足や経験のなさを

日こんな記事があったのに何で張ってないの？」とわざわざ言ってくる生徒や、記事の内容について質問する生徒も出てきています。一人でもこのような生徒が増えて欲しいという願いがあるわけですが、実はこれも自分が一番楽しんでるのかもしれないかもしれません。

『五段階表 算数4 国語4 体育5 社会2 理科3』その他4 ○ぼくからの言葉―説明の仕方はまあいいでしょう。これからはもうしょうしよう。これは、二学期最後の日に子ども達に二学期のまとめを書かせたときに、私自身の評価もしてもらったものであります。

なるほど、子どもはよく見ている。確かに社会の「2」は、二学期、机上の活動ばかりで力が入っていなかったな

先生への通知票

加藤 真弓

と私自身が思っていたことだ。

また、ある女の子は次のように書いてあった。

『授業の教え方』○相談にのる(女子のこと)○相談にのる(男子のこと)○私から一言―もっと男子におこっ

てほしい。この子は、ラブレターをも

らって、周りの男の子にひやかされていたのがいやだったらしい。悩んでいたの直接その子から話は聞いたが、ふ

だんカラッとしていた子なの

で、「嫌われるより、好かれるほうがいいじゃん。男の子たちも悪気はないんじゃない。」なんて言ってしまった結果かな。一時期、我が四年生クラスで「誰が好き」「誰がラブレターを渡した」など色恋沙汰がはやっていて、私も私自身が口出しをすべきものでないような気がするが、悩むところである。

『先生への通知票』の中には、四年生なりに私に気を使っている評価もあるが、もちろんシビアなものである。それを参考にしながら、教師として二年目を終えようとしている今、気分新たに、のんびりやっていこうと思う。(豊丘小)

ポケモンと記憶

片山 洋一

隣の部屋から、何やら念仏のような声が聞こえてくる。小学一年の娘と幼稚園の年少の息子の二人の声である。

『ピカチュウ・カイリユウ・ヤドラン・ピジョン・コダック・コラッタ・ズバット・ギャロップ……』

そう。テレビを見ていた子どもが何人も倒れて話題になったポケモン・モンスター。この「ポケモン言えるかな」という曲は、一番だけでも三十二匹のポケモンの名前が入

っており、全部で五番まであ

という。

小学一年の娘はともかく、つい、最近話せるようになった(気がする)四歳の息子

で、スラスラ一番を歌えるのは不思議でならない。家には、ゲームボーイや歌のCD

はないのに、口づてだけで覚えてしまったのだ。父親として、少しくやしきになり、半日がかりで必死に覚えようとしたが、二五匹ぐらいで苦しく

なりやめた。なぜ、心理学の記憶について少しは勉強してきた大人が

編集後記

「虹の地平を歩み出て」なつかしい歌詞ですね。札幌オリンピックのテーマソングです。この曲を聞く度にスキ

ーのジャンプのシーンが思い浮かびます。この会報が出る頃には長野オリンピックがク

ライマックスを迎えていることでしょう。このオリンピックで私たちはどれだけのものを心に刻み付けることができ

たでしょうか。平成九年度もいよいよ大詰め。思い深きクライマックスを迎えたいものです。(小山・佐藤)